

惠慶集と拾遺抄

— 惠慶集と撰集との関係 —

熊 本 守 雄

(一)

拾遺抄・十巻が、藤原公任によって編まれたものであるということは、もはや動かし難いことの部類にはいるであろう。又、それは、同じ公任の撰に成ると考えられている、如意宝集を増補改訂することによって、成立したものであるうとも考えられている。

即ち、拾遺抄は、如意宝集・十一巻から古今和歌集所載の歌などを除いて、それに又、新しい歌を加えて成ったものと推定されているのである。

藤原行成の権記に「長保元年十二月十四日癸亥詣東院奉返先日所借給拾遺抄歸宅」（傍点筆者、以下同様）とあるのを、十巻の拾遺抄のことを指しているのだと見做せば、長保元年（九九九年）十二月以前の成立であることは確定する。

更に、拾遺抄に見える官職が長徳三年（九九七年）七月までのことであり、拾遺和歌集の方では寛弘二年に及んでいること、又、拾遺抄の詞書きが長徳以後には及ばないのに対して、拾遺和歌集は寛

弘に下っていることなどから、拾遺抄の方が拾遺和歌集よりも先に成立したであろう、といわれている。

と同時に、それらから、拾遺抄の成立は、長徳三年七月以前のことであろうとされているのである。そして、拾遺抄を増補改訂して、拾遺和歌集が成ったと考えられている。

拾遺抄が如意宝集と極めて密接な関係にあることは、『惠慶集と如意宝集』（「国語教育研究」第十三号）に於いてふれたが、何分にも現在では、その如意宝集は断簡でしか伝えられておらず、全内容を完本についてみるということはできない。

元は、如意宝集は七百七十五首からなっていたものであるが、現在では五十四首ばかりを断簡で知ることができるだけである。断簡で知られる五十四首のうち古今和歌集所出の十六首を除き、三十八首全てが拾遺抄及び拾遺和歌集に見えていることを考えると、拾遺抄の総歌数五百八十八首のうちのほとんどが、既に如意宝集に収載されていた歌ではなかったかと考えられるのである。

したがって、ここで、拾遺抄に収載されている惠慶法師の歌と、

惠慶集の歌との関係を見ていこうとするに際して、まず想像されることは、惠慶集と拾遺抄との間に密接な関係があるようにみえても、それは、拾遺抄が惠慶集から直接に歌を採取したというような、直接的な関係があるのではなくして、おそらく、如意宝集をその両者の中間に媒介物としておいた、間接的な関係があるに過ぎないのではなからうか、ということである。

だが、それを如意宝集に於いて確かめるということは、ほとんどできないのである。

(二)

惠慶法師と、拾遺抄の撰者に擬せられている藤原公任との間には、どの程度の親密さであるかは不明だが、交友関係があったように思われる。少なくとも、お互いに面識はあったように推察される。

書陵部藏図書寮 150・558 本惠慶集に、次のような歌が見えている。

あるところにて、なてしこのはなおしむ心

<124> ころみにかへれはくるしなぞさに やとやからましなてし
この花

又

<125> いさりふねまかきのしまのかゝり火に 色みえまかふとこなつ
のはな

そして、後の「125」の歌は、夫木和歌抄・卷第二十三・雑部五の「鳥」

の項にも、収載されている。

公任卿歌合

海士の住むまかきの鳥のいさり火に 色見えまかふとこなつのはな

惠慶法師

夫木和歌抄が如何なる所伝によってこの歌を採録したものであるのかは不明であるが、夫木和歌抄によれば、藤原公任が催した歌合の歌であるということになる。

惠慶集によれば、歌合の歌ではなくて他の機会によまれた歌のようにも解せられるが、惠慶集にいう「あるところにて」というのが公任卿歌合を指すということになれば、惠慶集にみられる二首とも歌合の歌ということになって問題はなくなるし、又、他の機会によまれた既製の歌であっても、それが撰歌合に提出されることは有り得ることもあるから、ここでは、一応、夫木和歌抄の記述を信じて、公任卿歌合の時の歌としておいてよからう。

前大納言公任卿集（群書類従本）にも、次のような「なてしこ」をよんだ歌が収載されている。

からなてしこを人々よむに

76 敷嶋や大和にあらぬ撫子の 花はむへこそよにゝさりけれ
なてしこをみ給ひて

78 いそくへきよとはしかく床夏の花に心のとまりぬる哉

七月七日、藤つほの撫子あはせに、

人讀半都満字計たりける

82 たなはたの秋のよをへて撫子の 花をそけふは合せつとみよ

殊に、「いそぐべき」の歌には、惠慶法師の「海士の住む」の歌と同様に、「床夏の花」という語句をよみこんでいる。

夫木和歌抄の記述を信ずると、公任が催した歌合に於いて、惠慶法師が歌をよんでいるということになり、惠慶法師と藤原公任とは面識があったといえよう。

(三)

藤原公任は、拾遺抄に、面識のあったと思われる惠慶法師の歌を十六首ほど採録している。拾遺抄の總歌数が五百八十八首であるから、およそ、その三%にあたる歌数で、かなりな割合を占めていることになる。

拾遺抄に収められている、惠慶法師の歌十六首の内、十一首については、同じ歌を惠慶集にみることが出来る。この十一首は、惠慶集の歌と、何らかの意味に於いて、関係の存している歌だと考えられる。だが、必ずしも、惠慶集から直接に採録された歌だということではない。たとえば、その内の二首は、如意宝集にもみえているから、少なくとも、この二首の歌に関する限り、拾遺抄は如意宝集に拠っていると考えられる。この二首の他にも、如意宝集に拠っている歌もあることであろうから、その歌が惠慶集にみえているからといって、直ちに、惠慶集から採録した歌であるとみなすことはできない。

又右の十一首の他に、拾遺抄に収められている惠慶法師の歌の中には、惠慶集にみえている歌と同文ではないが、それとなんらかの関係の存していることの察せられる歌が、一首ある。

だが、残りの四首については、惠慶集の中には類似した歌すらも見い出すことはできない。この四首は、他本か他の歌反故の類から採歌したものと思われる。現存している古本系統と定家本系統との

二系統の惠慶集とは関係のない歌である。(註一)

(四)

まず、その惠慶集とは直接の関係はないと考えられる四首の歌からみていこう。

①

▲ 拾遺抄 卷第二 夏部 ▼

河原院のいつみのもとにて、すゝみ侍けるに

惠慶法師

86

▲ 松かけのいはるの水をむすひあけて 夏なき年と思ひける哉

②

▲ 拾遺抄 卷第三 秋部 ▼

東山に紅葉見にまかりて、又の日つとめて

まかりかへるとてよみ侍ける

惠慶法師

126

▲ 昨日よりけふはまされるもみちはの あすの色をはみてやゝみ

③

▲ 拾遺抄 卷第九 雑部下 ▼

あきはらへしに唐崎にまかりて、舟のまかり

けるを見て

惠慶法師

421

▲ おく山にたてらましかは渚漕 ふなきも今は紅葉しなまし

④

▲ 拾遺抄 卷第十 雑部下 ▼

三條のおほいまうち君の家のかへのゑに、旅人の

盗人にあひて侍けるかたをかきて侍ける 藤原為頼

548 ぬす人の龍田の山に入にけり おなしかさしの名をやなかさん
同繪に白馬引處に 惠慶法師

549 難波江のあしのはな毛のまされるは 津の國かひの駒にや有ら
ん

右の四首は、惠慶集にはみえておらず、出所不明の歌である。ただ④の「松かげのいはるの水を」の歌に關しては、いささかの検討がつかないでもない。この歌と詠歌された時を同じくするのではなからうかと考えられる歌が、祭主輔親卿集にみえている。

▲ 祭主輔親卿集 群書類従本 ▼

おなし月、かはらの院に人々ありて、泉の邊に
すむ所

19 いは水の涼しき陰をみるけふは 夏の暑さも忘られにけり

惠慶法師と大中臣輔親との間に交友關係のあること、及び、右の兩者の詞書きや歌の内容から考へて、右の輔親の歌は、先程の拾遺抄に於ける惠慶法師の歌と成立時を同じくするものであると思われ。祭主輔親卿集の詞書きによると、屏風歌のようである。拾遺抄に収められている惠慶法師の歌も、本来は屏風歌であつたのかもされない。あるいは、逆に、拾遺抄でいうように、夏のある日、河原院に入々が大勢集まって、泉のほとりで涼む心を詠じ合つた際のものかもしれない。ともかく、そうした時に人々が詠じた歌を記録したところの、歌反故の類があつたに相違ない。おそらく、拾遺抄（もしくは如意宝集）は、そうした歌反故の類から、先の惠慶法師の歌を収録したのであらう。

又、④の「難波江のあしのはな毛の」の歌も、屏風歌であるか

ら、それを記していた歌反故の類から採録したものであらうことは、充分に考えられることである。

残りの二首も、おそらく、そうした歌反故の類から採録されたものであらう。

以上の四首は、惠慶集とは關係のない歌である。

(四)

次に、その歌が全く同文で惠慶集にみえているというのではないが、惠慶集に収載されている歌との間に必ずや密接な關係が存しているであらうと察せられる惠慶法師の歌が、拾遺抄にみえているので、それを指適しておきたい。

⑤

▲ 拾遺抄 卷第三 秋部 ▼

修理大夫懷平家屏風に、たなはたまつりのかた
かける所に 惠慶法師

100 いたつらに過る月日をたなはたの 道よのかすとおもはましか

は
この歌と密接な關係があらうといった、惠慶集の歌というのは、次の歌である。

▲ 惠慶集 (古本系統) ▼

圖書寮 150・558 本

たなはた

(70) たなはたのあふよのかすをいたつらに すくす月日となすよし

も哉

右の惠慶集の「たなばた」の歌と、先の拾遺抄に於ける惠慶法師の歌とは、上句と下句とを握え換えたような歌である。即ち、拾遺抄の歌では、初句と第二句とが「いたづらに過る月日を」となっており、惠慶集の「たなばた」の歌では、第三句・第四句が「いたづらにすぎず月日」となっている。又、拾遺抄に於いては、第三句・第四句が「たなばたの逢よのかず」となっており、惠慶集では、初句・第二句に「たなばたのあふよのかずを」という語句がみえている。

拾遺抄の歌は、その詞書きによると、修理大夫懷平家の屏風を詠んだ歌だということである。藤原懷平は、公卿補任によれば、永観元年（九八三年）十二月十三日に修理大夫に任じ、長徳四年（九九八年）十月廿三日に参議に任ずるまで在官しているから、拾遺抄に収録されている屏風歌の詠作された大体の時期は推察される。

一方、惠慶集の成立は、正暦元年（九九〇年）以後のことであるから（註⑤）、修理大夫懷平家で詠んだ屏風歌を、惠慶集に収める時に改作したということも考えられないことはないが、惠慶集に於ける「たなばた」の歌の置かれてある位置（つまりは、この歌の前に置かれてある歌の内容）から考えると、惠慶集にみえている歌の方が先にできていたように思われる。即ち、拾遺抄に採録されている屏風歌は、懷平家で初めて詠作されたものというよりも、別の機会に詠んでいたところの、既製の歌を改作して提示したもののよう
うに思われる。

とまれ、拾遺抄に採録されている懷平家屏風歌と、惠慶集の「たなばた」の歌との間には、その先後がどちらであるにしても、緊密な関係があるといえよう。

(六)

惠慶法師の歌は、拾遺抄に十六首収録されており、そのうちの十一首は惠慶集にもみえているということは、既に述べたところであるが、その大部分は、古本系統の惠慶集から採録されたところの歌のように目される。（註⑥）

そのことは、拾遺抄が古本系統の本文に於いてしか見ることのできない歌（定家本系統の本文には欠脱している歌）を収録していること、及び、拾遺抄に於ける惠慶法師の歌の本文が古本系統の本文に全く一致しているか、もしくは、定家本系統の本文に対してよりも古本系統の本文の方により近似していることなどから、窺えるのである。

拾遺抄は、古本系統の本文に於いてしか見ることのできない歌を二首収録している。

⑥

▲ 拾遺抄 卷第三 秋部 ▼

河原院にて、あれたる宿にあきのきたるころ、

人々のよみ侍けるに

惠慶法師

92 八重葎しけれの宿のさひしきに

人こそみえね秋はきにけり

▲ 惠慶集（古本系統）▼

図書寮 150・558 本

▲ 惠慶集（定家本系統）▼

図書寮 501・401 本

あれたるやと

やへむくらしけるやとの

（欠脱）

(101)

さひしきに人こそみえね

あきはきにけり

⑦

▲ 拾遺抄 卷第六 別部 ▼

人の國へまかり侍けるに、あまのしほはたれ侍ける

を見侍て

惠慶法師

231

▲ 惠慶集 (古本系統) ▼

図書寮 150・558 本

あまのしほやにとまりて、

しほたるゝをみて

(66)

ふるさとをこふるたもとは

かはかぬにまたしほたるゝ

あまもありけり

※ ※

又、拾遺抄に於ける歌の詞句は、古本系統の歌の詞句に近い。

※

▲ 拾遺抄 卷第一 春部 ▼

やまとにくたり侍けるに、ゐてといふ所に山ふきの

いとほしうさきて侍を見侍て

惠慶法師

46

▲ 惠慶集 (古本系統) ▼

図書寮 150・558 本

やまとへくたるみちに、

ゐてといふところに、

やまふきのはなの、いとお

もしろきに

▲ 惠慶集 (定家本系統) ▼

図書寮 501・401 本

此さと人になりぬへきかな

惠慶法師

やまとにまかるに、ゐてといふ所、いとおもしろし

⑧

やまふきのはなのさかりに
ゐてきてこのさと人とな
りぬへき哉

<36>

山吹の花のさかりにゐて
きてこのさと人となりぬへ
きかな

⑨

▲ 拾遺抄 卷第九 雑部下 ▼

すみよしに詣て、讀侍ける

安法法師

443

あまくたるあらひと神の相生を 思へは久し住吉の松

444

我とは、神よのこともかたらなむ つかしをしれるすみよ
しの松 惠慶法師

▲ 惠慶集 (古本系統) ▼

図書寮 150・558 本

すみよしにまうてゝ、すみ
よしの松といふことを、は
てに人へよむに

▲ 惠慶集 (定家本系統) ▼

図書寮 501・401 本

すみよしに人へまでゝ、
すみよしといふことゝよむ

(121)

われとは、神よのことも
かたらなむ つかしをしれる
すみよしの松

(117)

わかとは、かみよのことも
こたへなむ つかしをしれる
すみよしのまつ

⑩

▲ 拾遺抄 卷第十 雑部下 ▼

草あはせし侍ける所にて

惠慶法師

520

たねなくてなき物草は生にけり まくてふ事はあらしと思ふ

《惠慶集（古本系統）》
圖書寮150・558本

《惠慶集（定家本系統）》
圖書寮501・401本

《惠慶集（古本系統）》
圖書寮150・558本

《惠慶集（定家筆本）》
前田本・下巻

(57)

あるところの方わけて、
くさはせする吾
たねなくてなきものくさは
おいにけりまくてふことは
あらしと思ふ

<56>

ある所にかたわきて、草合
するに
たねなくてなき物くさはお
いにけりまくといふ事はあ
らしと思

(284)

かのと
さをしかのともまとはせる
こゑするはつまやこひしき
あきのやまへに

<280>

かのと
さをしかのともまとはせる
こゑするはつまや戀しき秋
の山へに

(七)

拾遺抄は、惠慶集の下巻の百首歌の部分からも歌を採録してい
る。

中世以後は、定家本系統の惠慶集が流布し、しかも、その流布し
たのは、上巻の部分だけである。又、鎌倉時代の中頃には、惠慶法
師百首歌の物名歌の部分は、後部錯乱によって、兼輔集に竄入して
しまい、統後拾遺和歌集などは、「ひのと」の歌を、兼輔の作とし
て掲げてしまうことになる。(註七)

拾遺抄が惠慶集の下巻の物名歌の部分から歌を採録していると
いうことは、拾遺抄の編まれた時期に於いては、後世に於いて生じ
るところの、前述したようなことが、まだ何ら起っていないか
ということ、間接的に示しているといえよう。

⑪

《拾遺抄 卷第九 雑部上》

かのと、いふことを

惠慶法師

499 小男鹿のともまとはせる聲す也 つまや戀しき秋の山邊に

(八)

拾遺抄は如意宝集を増補改訂することによって成ったものよう
であるから、拾遺抄に収録されている歌が、惠慶集にみえているか
らといって、直ちに、惠慶集から採録した歌であるとみなすことは
許されないと、(一)節、及び(二)節に於いて述べたが、次に掲げる二首
などが、その場合である。

⑫

《拾遺抄 卷第四 冬部》

冬月を見侍て、よみ侍ける

惠慶法師

165 天の原そらさへさえや渡るらん こほりとみゆる冬のよの月

《如意宝集 卷第四》

つきをみはへりて

惠慶法師

あまのはらそらさへさえやわたるらむ こほりとみゆるふゆの
よのつき

▲惠慶集(古本系統)▽

圖書寮150・558本

冬のよるの月

あまのかは、そらさへさえや
わたるらんこほりとみゆる
ふゆのよの月

(108)

▲惠慶集(定家本系統)▽

圖書寮501・401本

冬のよの月

あまのはらそらさへさえや
まさるらむこほりと見ゆる
冬のよの月

<103>

⑬

▲拾遺抄 卷第十 雑部下

かうふりやなきを見侍て

550

かはやなき絲はみとりに有物を

かうふりやなきをみはへりて

かはやなきいとほみとりにあるものを
いつれかあけのころも
いつれかあけのころも成らん

▲惠慶集(古本系統)▽

圖書寮150・558本

かうふりやなき

かはやなきいとほみとりも
あるものをいつれかあけの
ころもなるらん

▲惠慶集(定家本系統)▽

圖書寮501・401本

かうふりやなき

あをやきのいとほみとりに
ある物をいつれかあけの衣
なる覽

<49>

右の二首は、惠慶集↓如意宝集↓拾遺抄という経路で、拾遺抄に収録された歌と考えられる。

しかも、拾遺抄の拠ったところの如意宝集は、おそらく、これらの歌を古本系統の惠慶集から採録したものであらうと思われる。

右の二首の他にも、拾遺抄に収載されている惠慶法師の歌の中には、如意宝集を通して採録された歌があると察せられるが、何分にも、如意宝集は、現在、断簡でしか伝えられておらず、如何ともしがたい。

惠慶集にみえてゐる歌の詞句といささか異なっている、次のような歌は、あるいは、如意宝集を通して拾遺抄に採録された歌であるのかもしれない。

⑭

▲拾遺抄 卷第一 春部

あれはて、人もはへらぬ所に、櫻花咲て侍を

見て

40 あさち原主なき宿の櫻はな 心やすくもかせにちるらむ

▲惠慶集(古本系統)▽

圖書寮150・558本

むかし人のいゑにありける
所のせんさいなりけるさく
らのおもしろくさきたる

⑮ あさちはらぬしなきやとの
さくらはなこゝろやすくや
かせにちるらん

▲惠慶集(定家本系統)▽

圖書寮501・401本

むかし人の家ありける所の
まへなりけるさくらのいと
おもしろかりけるを見て

<34>

あさ地原ぬしなきやとの櫻
花心やすくや風にちるらむ

拾遺抄にみえてゐる、右の二首は、古本系統の惠慶集に於ける歌の詞句と極めて近似しているが、惠慶集から直接に採録したものはなく、おそらく、如意宝集に拠つたものであらう。拾遺抄に於ける歌の詞句と、如意宝集に於けるそれとは、全く完全に一致する。

⑮
▲ 拾遺抄 卷第三 秋部 ▼

八月はかりに、鷹の聲をまつ心のうたよみ
侍けるを

惠慶

112
をきのはもや、うちそよく程なるを
らん

▲ 惠慶集 (古本系統) ▼
図書寮 150・558本

八月とをきくに、くたる人
に、あふき心さすとて

72
あふきつゝかりのはかせを
ふくほとにわかれを人やつ
くへかりける

おなし人かりのこゑまつ
ころ

73
おきのはもや、うちそよく
ほとなるをなとかかりかね
をとなかるらん

▲ 惠慶集 (定家本系統) ▼
図書寮 501・401本

八月とをくまかる人に、あ
ふきとらすとて

<70>
扇とてかりのはかせをふく
ほとにわかれむほとやつく
へかりける

おなし人かりのこゑをま
つ

<71>
萩の葉もや、うちそよくほ
となるをなとかかりかねを
となかるらん

⑯
▲ 拾遺抄 卷第三 秋部 ▼

二條右大臣の粟田の山庄の障子のゑに、たひ人の
紅葉ある所にやとりたるかたある所に 惠慶法師

134
いまよりは紅葉のもとに宿からし
をしむに旅の日數へぬへし

▲ 惠慶集 (古本系統) ▼
図書寮 150・558本

十月はかりにたひゆく人の
もみちしたる木のもとにや
とりたるを

(134)
行すゑはもみちのもとにや
と、らしおしむにたひの日
かすへぬへし

▲ 惠慶集 (定家本系統) ▼
図書寮 501・401本

十月はかりに、もみちのも
とにやとりたるを

<129>
ゆくすゑも、みちのもとに
やと、らしをしむにたひの
ひかすへにけり

以上みてきた十六首が、拾遺抄に収録されている惠慶法師の歌
全である。

この十六首は、そのまま、拾遺和歌集にも収録されてある。だが
「かはやなぎ」の歌には、誤って、「仲文」の名が記されてある。

▲ 拾遺和歌集 卷第九 雑下 ▼
かうふり柳をみて 仲文

551
河柳糸はみとりにあるものを いつれかあけの衣なるらむ
この他に、惠慶法師に関連して、拾遺抄と拾遺和歌集とで異なっ
ている箇所がある。それは、拾遺抄に於いては作者を禪慶法師とし
ていた歌に、拾遺和歌集では惠慶法師の名を付していることであ
る。

▲ 拾遺抄 卷第十 雑部下 ▼

雨ふる日、大原河をわたり侍けるに、ひるの

546
あしたにつきて侍ければ 禪慶法師
世中にあやしき物は雨ふれと 大原川のひるにさりける

△ 拾遺和歌集 卷第九 雑下 △

雨ふる日、大はら川をまかり渡りけるに、ひるの

つきたりければ

惠慶法師

550 世中にあやしき物は雨ふれと 大原川の干るにそありける

更に、拾遺和歌集に於いては、拾遺抄には収載していなかった、次の二首の歌を増補している。

△ 拾遺和歌集 卷第三 秋 △

初瀬へまうて侍りけるみちに、佐保山のもとに

まかりやとりて、あしたに霧の立ちわたりて

はへりければ

惠慶法師

193 紅葉みに宿れる我としらねはや さほの川霧立ち隠すらむ

△ 拾遺和歌集 卷第十六 雑春 △

子日

惠慶法師

1023 引てみる子日の松は程なきを 争で籠れる千世にかある覧

註1 惠慶集には、古本系統の伝本と、定家本系統の伝本との二類

がある。古本系統の惠慶集については『古本系統の惠慶集につ

いて——関西大学蔵(岩崎美隆文庫)本と書陵部蔵(図書寮

150・558)本——』(『国語国文』昭和四十一年八月

号)に又、定家本系統の惠慶集については『図書

寮本惠慶集(501・401)について——定家自筆本の原型——』

(『国文学攷』第三十二号)において、それぞれ詳述したので、

ここではそれに一切譲る。

註2 詳しくは、『惠慶集と如意宝集——惠慶集と撰集との関係

——』(『国語教育研究』第十三号)、及び『粟田山庄障子絵

と和歌と漢詩——惠慶集と江吏部集——』(『国語と国

文学』昭和四十二年七月号)を参照されたい。

註3 必ずしも、拾遺抄が古本系統の惠慶集から採録したというのではない。その歌の出所が、古本系統の惠慶集だといっているのである。この十一首の中には、如意宝集に於いて既に収録されている歌がある。

註4 詳しくは、前掲の『古本系統の惠慶集について』、及び『惠慶集と夫木和歌抄——惠慶集と撰集との関係——』(『文学語学』第四十一号)、『惠慶集と萬代和歌集・雲葉和歌集——惠慶集と撰集との関係——』(『中世文芸』三十六号)を参照していただきたい。

(山口女子短期大学助手)